KAMEN RIDER GANBARIDE-THE FAINAL LEGEND-

ログ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　ＧＡＮＢＡＲＩＤＥ－ＴＨＥ　ＦＡＩＮＡＬ　ＬＥＧＥＮＤ－

【Ｎコード】
Ｎ８５４４Ｘ

【作者名】
ログ

【あらすじ】
謎のガンバライドカードを手にした少年、門司仁。
そのカードに描かれているのは、知らないライダーだった。
カードに導かれるかのように、ガンバライドに吸い込まれ、目にしたものは壮絶なライダーバトルだった・・・。

ベルトキタ――――！

俺は、ゲームセンターをぶらついていく。
目の前にはガンバライドがある。
前から、興味あったんだ。
でも恥ずかしくてできなかったんだ。

一回ぐらいなら、恥ずかしくもないよね。

チャリン。
百円玉を入れる。
すると、カードが出てきた。
これが、ガンバライドカードか。
ピンク色の淵のディケイドが使用するものに少し似ているカード。
そこに描かれているのは、知らないライダーだった。

「仮面ライダーガンバライド」??
そんなライダー知らないなぁ・・・。
俺は、そのカードしか持っていないため、それをスキャンした。
すると・・・。
俺の体がガンバライドの筐体に吸い込まれていった。
嘘だろぉぉぉぉぉぉぉぉ？

あれ・・・ここは・・・？
俺は、夜の廃墟に倒れていた。

すると、誰かがやってきた。
？？？？？？？「お前、ただの人間だなぁぁぁ？」
？？？「ウガァァァァァァァァァァァァ！！！」
目の前には、地獄兄弟と、紫目のオーズがいた。
キックホッパー（以下キックH）「ぶっ倒されてもいいのかぁ・・・？」
パンチホッパー（以下パンチH）「汚してやる！！」
オーズ「ウァァァァァァァァァァ！」
キックH「まぁ、騒ぐな。」
パンチH「お前みたいなただの人間は、ここでは生きていけないんだよ！！」
オーズ「ウォォォォォォォォォォォォォォ！」

あー、大体分かった。
ネガの世界みたいな感じなんだね。

キックH「お前に地獄を見せてやる。」
オーズ「ウォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！」
オーズがこっちに向かって殴りかかってきた。

ああ・・・、俺もうだめだ。
もうどうでもいいや。
さよなら――――――え？

俺の目の前に、二人のライダーが立ちはだかる。
？？？？？「大丈夫か？」
？？？？「とにかく、出会ったからには、お前もダチだ！地獄兄弟もな！」
そこには、ディケイドとフォーゼがいた。
ディケイド「俺は、仮面ライダーディケイド。覚えとけ！」

フォーゼ「俺は、仮面ライダーフォーゼ！！ガンバライド、キター――――――――――――――！」

なんだ？ここは？
ライダーが目の前にいる？
夢のようだ！
フォーゼ「おい、アンタ。名前は？」
俺――――？俺は、門司仁（かどつかじん）。
フォーゼ「仁か！気に入った！これやるぜ！」
フォーゼは、俺にフォーゼドライバーのような、アクセルドライバーのようなものを渡した。
赤い起動用のスイッチがない。
その代わり、ベルトの真ん中に、メモリスロットがある。

俺は、さっき手に入れたカードを相手に見せた。
仁「見ろ！俺も仮面ライダーだ！」
ベルトを腰に巻きつけた。
すると、カードはガイアメモリへと変わった。
「G」と書かれたガイアメモリだ。
仁「変身！」
「ガンバライド」
俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。
「3・・・2・・・1！」
そして、グリップを前に動かす。
「ガンバライド！！　ガ・ン・バ！ガンバ！！」
再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのＣＭの音声が流れる。
俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「俺は、ガンバライドとして戦う！！終わりがくるま

で！！」
ディケイド「俺は通りすがりの仮面ライダーだ！覚えとけ！」
フォーゼ「宇宙キタ――――！」
ガンバライド「勝負だ！」

オーズ「ウガァァァァァァァ！」
オーズは俺に襲い掛かってきた。
ガンバライド「はぁっ！！」

パンチH「そらぁ！」
フォーゼ「これならどうだ！」
「ロケット・オン」
フォーゼ「ロケットパンチ！！」
パンチH「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
パンチHは一発でノックアウトされた。

キックH「ライダー・・キック！！」
「ファイナルアタックライド　ディディディディディケイド」
ディケイド「はぁーーーーーー！」
キックH「がぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ガンバライド「どうすりゃいいんだぁ・・？」
オーズ「ぐわぁぁぁぁぁぁあ！」
オーズはトラクローで、攻撃してくる。
ガンバライド「そりゃぁ！」
そうだ――――。スイッチがある！
俺は、一番右のスイッチを押してみた。
「マシンガン・オン」
俺の手に、マシンガンが取り付いた。

ズババババババババババッ！
オーズ「ガァァァァッ！！！」
ガンバライド「今回はこれで負けてしまいな！」
「マシンガン・ゲキレツアタック」
グリップを再び前に動かしてみた。
ガンバライド「必殺技だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
マシンガンから、無数のビーム弾がオーズを襲った。
オーズ「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

オーズと地獄兄弟は、カードになってひらひらと中を舞っていた。
ガンバライド「俺達は、何をすればいいんだ？」

ディケイド「この世界は、ガンバライドの世界だ。」
ガンバライド「ガンバライドの世界？」
ディケイド「そう、ここはガンバライドの世界だ。平行世界論は知ってるか？それぞれ独立して世界があるっていう。その世界の中の一つ、それがガンバライドの世界だ。お前の世界にあるようなガンバライドの筐体につながっているんだ。ミラーワールドのように。」
ガンバライド「で、この世界では何をするんだ？」
フォーゼ「この世界のライダー全員とダチになる！」
ディケイド「ちがう！俺達は、ここでバトルロワイヤルさせられている！勝ち残らなければならないんだ！」
ガンバライド「へぇ～、なるほｄ・・・。」

不意に爆発が起きた。
そこには、青が主体のライダーが一人いた。
あれは・・・。
ディケイド「ディエンドだと・・・？」

ディエンド「さてと、お宝はどこかな？」
ガンバライド「ディエンドか！お前にやる宝はねぇ！」
「マシンガン・オン」
ズババババババババ！
俺は、マシンガンを乱射した。
ディエンド「なかなかやるね！でもこれには勝てないだろう！」
「カメンライド　ＮＥＷ電王」

ＮＥＷ電王「テディ、カウントダウンだ。６秒でいい。」
テディ「ＯＫ。・・・６。」

まずＮＥＷ電王が切りかかってきた。
俺はそれを避ける。

５。
その隙を突いて、俺を突く。

４。
ディエンドはジャンプした。
「アタックライド　ブラスト」
そして、弾を乱射する。
そして俺達に当たる。

３。
「フルチャージ」
ＮＥＷ電王「行くぞぉぉ！」
ＮＥＷ電王は走ってきた。

２。
「ファイナルアタックライド　ディディディディエンド」
ディエンドは俺達にターゲットを向けてきた。

１。
ＮＥＷ電王は俺を斬った後、ディメンションシュートの渦に巻き込まれ、俺達はその攻撃を受ける。

０。
ディエンド「タイムアップ！」

ガンバライド「ぐ・・・ぐはぁああ・・・。」

ディエンド「まだ実体を持ってるなんて、しぶといね。まさか、特殊な存在かもね。でも、このカードのライダー達はもらうよ。」
ディエンドは、カードを五枚、広げて見せる。

そこには、このようにカードが並んでいた。
仮面ライダーパンチホッパー
仮面ライダーキックホッパー
仮面ライダーオーズ
仮面ライダーディケイド
仮面ライダーフォーゼ

ディケイドとフォーゼがカード化してしまっていたのだ。

ディエンド「じゃあ、また会おう。」
「アタックライド　インビジブル」

ガンバライド「ちくしょぉ・・・・ちくしょぉぉぉぉ！！！」
俺は、仲間がいなくなったことで悲しみにあふれていた。
俺は顔をあげる。

すると、目の前には世界の端がつながっていた。
そして、俺は歩き出した。
そこなら、強くなれるかもしれない。
俺は、そこに向かって飛び込んだ。

無のエリア／ディケイドのガセ

そこは、真っ暗な闇だった。

仁「で・・ディケイドの話だと、ここはバトルロワイヤルで、一人になるまで戦い続けｒ・・・・って俺はなんて世界に来てしまったんだよぉぉぉぉぉぉぉ！」

一人、嘆く俺。

??「少年よ、慌てるな。」

仁「???誰??」

そこには、桜井侑斗のような服装をした、一人の男性が立っていた。

あれは、鳴滝さん？

鳴滝「よく分かったな。君の仮面ライダー好きは良く知ってるよ。」

自称・預言者の鳴滝さんがなぜここに？

鳴滝「自称ではないが・・・、バトルロワイヤルなんてディケイドの嘘だ。」

仁「なんでわかるんですか？」

鳴滝「この世界は、無数のエリアに分かれている！！」

仁「エリア？」

鳴滝「君の知っているライダーの世界を再現したようなエリアもあれば、古き伝統を受け継いで暮らす民族が持つエリアもある。また、恐竜が未だにいるエリアがあれば、一日中戦争しているエリアもある。そう、ここは無数のエリアで成り立っているのだよ。」

仁「で、ここはどんなエリア？」

鳴滝「無のエリアさ。」

無のエリア・・・？

一瞬、鳴滝の言葉に、耳を疑った。

仁「無・・・ですか？何もないって事ですか？」

鳴滝「そうさ、他のエリアは、コズミックエナジーがあるが、ここにはない。それだけのことだ。」
仁「なるｈ・・・・でも、何でこうやって俺達は存在しているのだろうか・・・。」
鳴滝「言いたいことは分かってる。でも、話がそれてしまったね。じゃ、この世界について、話してやろう。」

この世界は、ガンバライドの世界だ。
２００８年末に、ディケイドが本格的に活動する少し前に誕生した。
そして、ディケイドは世界を巡るたびに出ていたが、なぜかもう一人ディケイドが存在した。
それが、この世界でさっき君が出会ったディケイドだよ。
君の知ってる、テレビで見るディケイドとは全く違うディケイドだ。
そのディケイドは、あるときは廃墟でディエンドと戦い、風都でＷたちと戦い、そして平地でたくさんのライダー達と共闘していた。
そのディケイドは、多彩な技を習得していった。
１０数もの過激な技を繰り出して、ライダーたちと戦っていた。
そのディケイドが倒したライダーは、死ぬことがなかった。
ディケイドは手加減していたようだ。
そして、他のライダーに影響がなく、ある意味平和だった。

しかし、元々はビル街しかないエリアが廃墟に風都に地下用水路に山寺など、いろいろなエリアが増えていった。
それが最近、急速に増え、１００以上のエリアが誕生したんだ。

鳴滝「それが・・・このガンバライドの世界だ。君は、この世界から出られなくなってしまった。」
仁「そんな勝手な！！出る方法はないのかよ！！」
鳴滝「それが・・・ないことはない・・・・ただ・・・入手が困難なゾーンメモリを伝説の祭壇に差し込めば、脱出できるそうだがな・

・。」
仁「じゃあ、そのゾーンメモリを取ってくるぜ！待ってろよ！鳴滝！！」
鳴滝「ちょっ・・・・・。」
俺は、再び現れた壁に向かって歩き出した。

仁「変身！」
「ガンバライド」
俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。
「３・・・２・・・１！」
そして、グリップを前に動かす。
「ガンバライド！！　ガ・ン・バ！ガンバ！！」
再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのＣＭの音声が流れる。
俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「行くぜ、行くぜ、行くぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

ニンジャエリア／シノビ・超変身！

ガンバライド「ここは、なにかな～？」
俺は、まるで太秦映画村に来たような気分だった。
だって、ここは江戸時代のような町に立っているんだから！！！
ガンバライド「なんだ～？ここ、京都か？それともサムライワールドか？」

？？？「惜しいな！ここは、ニンジャエリアだ！」
ニンジャエリア・・・・って事は、忍者がいっぱいいるのか、忍者が支配しているのか、どっちかだな！！
ガンバライド「お前は誰だ？？」
？？？「俺は、仮面ライダーシノビだ！！」
ガンバライド「よぉ！シノビ！」
シノビ「よろしく！」

シノビは、この世界を、悪の忍者軍団「くノ一」から世界を守っているそうだ。
くノ一は女性だけで組織されてるそうだ。
ガンバライド「女性相手になぜ負ける？」
シノビ「バカか？そういうのは差別だぞ～？でもさ、強いぜ？トリッキーにさ。」
ガンバライド「そうか・・・じゃ、差別はやめとくｚ・・・あれの事か？くノ一って。」
シノビ「そうだ！こいつらがくノ一だ！」
くノ一の戦闘員達２０人が、俺達を襲ってきた。
戦闘員「アァァァァァ！」
「マシンガン・オン」
俺は、マシンガンスイッチを起動させた。

すると、弾が連射される。
戦闘員「グワァァァァ！」
そして、マシンガンスイッチをオフにした後、それを抜き、サーベルスイッチを入れ、起動させた。
サーベルスイッチはマシンガンと同じ○部分に差し込むスイッチなのだ。
「サーベル・オン」
ズバッ！
シュパッ！
戦闘員「アァァァン！」
戦闘員「キヤァァァァァァ！」

「サーベル・ゲキレツアタック」
ガンバライド「ツルギ・ゲキレツスラッシュ！！！」
俺は、必殺技を繰り出す。
ズヴァァァァァァァァァッ！
戦闘員「アァァァァァァァァァッァァ！」
今回のくノ一、ある意味危険だ。
年齢制限の危険がある。
早いうちに倒してしまおう。

シノビ「早いうちに倒すか・・・・、さっきの戦い・・・なかなか良かったよ！お前となら、やれる！行こうぜ！」

俺達は９－１ＣＡＳＴＬＥに来ていた。
このネーミングは間違ってないよな。
そして、その前にある池に俺達はもぐっている。
シノビ「静かに行くぞ・・・・・。」
ガンバライド「ああ・・・・。」

俺達は、この池のそこにある、排水溝口に入り、そのまま進入。
そして、隙を突いてボスを旬殺。
あまりにもシンプルで、不安なサクセンでもある。
頑張らなきゃ。

俺達は排水溝口にもぐりこんで、何とか中に潜入した。
シノビと俺は、シノビの力で姿を消し、そろそろと歩いていた。

そして、1分、2分、3分と、時が流れていった・・・。
シノビ「あれ・・・さっき、この道通ったよな？」
ガンバライド「あ・・・そういえば・・・・。」
シノビ「もしや・・・・・・。」
ガンバライド「・・・？」
シノビ「ちょっと待ってろ。」
ガンバライド「お・・・おい！」
なにやら、シノビは奇妙な術を唱えた。
シノビ「はぁぁぁぁぁぁっ！シノビ流忍法”壁破り”！！」

忍法”壁破り”の力で、何とか、エンドレスからは逃れられた。
しかし・・・・くノ一はどこへ・・・・？

シノビ「ここだよ。」
ガンバライド「そうか・・・・。」
シノビ「行くぞ！」

俺達は、ふすまを開けた。
すると、そこにくノ一がいた。
シノビ「成敗！」
くノ一「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
くノ一は、一撃で殺された・・・・。

しかし・・・・。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

すると城の前に、大きな巨人が現れた。

ガンバライド「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・。どうすんだよ！あれ！」

シノビ「俺の役目はもう終わった。」

突然、シノビが訳のわからないことを言った。

ガンバライド「冗談はやめろって・・・・。」

シノビ「俺の力をお前に託す。それが俺が鳴滝に言われた最後の使命だ。」

ガンバライド「・・・・そっか。」

鳴滝さんの言うことならしょうがない。

今、信用できるのは鳴滝さんと、それに協力するものたちだけだから。

シノビ「最終忍法”忍押箱”＞＞シノビスイッチ＜＜」

シノビが忍法を唱えると、アストロスイッチに変わった。

銀に輝く、○部分のスイッチだ。

俺は、サーベルスイッチを抜き、シノビスイッチを入れ、起動させた。

「シノビ・オン」

すると、和風の音楽が流れ、俺の体を銀の光が包んだ。

ガンバライド「うぉぉぉぉぉぉ！！！」

気がつくと俺は、銀と黒が主体の姿になっていた。

―――ガンバライド！これが、お前の初強化だな！

ふいに、シノビの声が聞えた。

―――これが、お前の強化形態の一つ「シノビステイツ」だ！

ガンバライド「ありがとよ！」

この装備は、腕にブレスがしてあるぐらいだ。
まずは・・・「壱」のスイッチを押そう。
「イリュージョン・オン」
俺は、３つに分身した。
ガンバライド「すぐに終わらせてやる！」

俺は、城をぬけ、巨人に向かってとび蹴りを放った。
巨人はよろめく。
次は、「弐」のスイッチだ。
「インビジブル・オン」
俺の分身能力がなくなり、そのかわり自分の姿を消した。
後ろに回り込み、連続蹴りを放つ。
巨人はそのすさまじい蹴りで唸る。
さらに、「参」のスイッチを押す。
すると、今までの効果が消え、手には手裏剣がある状態になった。
俺は、それを投げる。
巨人はまた激しく唸る。

ガンバライド「よし！とどめだ！」
「シノビ・ゲキレツアタック」
俺の後ろから、無数の手裏剣が飛び出し、巨人を貫く。
そして、俺は分身し、さらに姿を消し、飛んで連続蹴りを放った。
巨人は、跡形もなく消えた。

仁「ふぅ・・・・さっぱりしたぁ・・・・。」
そう思ってるとまた、目の前に灰色の壁が現れた。
仁「次は、どんな世界かなぁ～??」
俺は、ワクワクしながら飛び込んだ。

すると、俺はなぜか、どこかの学校にいて、さらに学生服を着ていた。
仁「なんで、学生服？」
俺は、訳がわからなくなっていた。
周りを見渡すと、空を見上げている一人の青年がいた。
気を落ち着かせるため、俺も空を見ることにした。
その空は、とても青くきれいな、青空だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8544x/

KAMEN RIDER GANBARIDE-THE FAINAL LEGEND-

2011年11月20日21時40分発行